

〔講演〕

マス・コミュニケーションの社会学

ジョルジュ・フリードマン

序

マス・コミュニケーションという用語は今日では一般には技術文明とは不可分な文化的現象の全体を指すものである。その中には大新聞（日刊、週刊を含む）、雑誌、ラジオ放送、映画、LP、テレビジョン、広告等が含まれているが、これだけに尽きるのではない。20世紀における経済的に発達した先進諸国はそうしたマス・コミュニケーションの主要な支柱であるが、その影響は急速に第三の世界の開発途上国にも及んでいる。

マス・コミュニケーションの社会学の第一義的任務の一つはこの言葉のも一つまたはそれ以上の意義とその要素を明かにすることにあるといえよう。そこでまず、コミュニケーションの諸々の種類と大衆社会の諸側面との関係を規定することが必要であろう。大衆社会の諸側面というのは大量生産、大衆消費、大量の聴衆など技術文明を構成する特徴的事実である。

次にマス・コミュニケーションの社会学という表現はマス・コミュニケーションについての社会学の接近が唯一のものであり、それは他との関係をもたない自己充足的なものであると見ることを意味するのではない。私はたびたび他の人間科学の見地を参考にするようになるであろう。とくに社会心理学、精神分析、民族学、経済学、人口学等を参考にするであろう。しかし反対に社会学の接近も、人間集団や集合的起源をもつ動機づけが関係するときにはいつも正当とされるし、また必要なものである。集合体や集合的動機づけがこの領域においてあらわれる時にとる主要な形態を起点とするとき、次の四つの研究部門を区別できるのである。

- I. マス・コミュニケーションとそれが発達している包括社会との関係の研究。
- II. マス・コミュニケーションの効果に関する

研究。

- III. マス・コミュニケーションに対応する態度、役割、機能、要求についての研究。
- IV. マス・コミュニケーションの内容の研究。

I マス・コミュニケーションとそれが発達している包括社会の関係

最初にどんな社会についてもそれとそれに固有であり且つまた機能的にそれと統合されているコミュニケーションの型との間に一定の関係が存在することを想起しよう。マリノフスキーは「どんな型の文明においても、あらゆる慣習、物的対象、観念、信念は一定の緊要な機能を営み、一定の役割を把持し、有機的全体の中における不可欠な部分を代表しているものである」とのべている。この指摘は未開社会について適合するものであるが、もっと複雑な社会のすべてに対しても妥当する。民族学者は社会の文化の所産である言語がどの程度伝達の用具として機能をはたしているかを研究している。この見地から、人類学的でもあり社会学的でもある見地に移行してみると、現代の産業社会におけるマス・コミュニケーションの出現はもっと詳細にわたる研究に値するものといえる。また印刷術は、伝統的社会の衰退、資本主義の初期の発展、科学・技術の躍進、経済活動（工業および商業を含む）の新しい律動の時期に力をもちはじめたのであり、この時期には伝達の古い体制はもはや人間の要求には応じられないものとなっていたことを明かにしたといえる。

人間の活動と人間の相互作用において生じた急激な変化は人の手による原典の筆写、ふれ回り役や吟遊詩人（中世の）とは異ったものを要請してきたのであった。第二の段階においては機械利用の漸進的発展、ついで1880年以降における大量生産と大衆消費の出現は短期間の後にマス・コミュニケーションの制度の発展をひきおこさしめること

になった。この点からみると、コス・コミュニケーションは技術文明の制度 *institutions*(デュルケームのいう意味で)としてあるいはマルセル・モースの用語によれば、文明の事実 *faits de civilisation* として現れるのである。

II 効果の研究における集合体!

人間集団の出現

マス・コミュニケーションについて行われてきた諸々の研究は、その最初の、比較的長い時期(約1930~1945までの間)においては、社会が相互に孤立しており、しかも直接個人としてマス・コミュニケーションの影響にさらされていて、人々相互の間に何の連帯もないような状況に適合している社会像に立脚していた。つまり社会は一つの聴衆であると考えられ、そこでは理論的に人々の年齢、性、階級は区別されてはいたが、マス・メディア(この時期では主として新聞とラジオ)が人々に与える効果を発見し、研究していくために第一次集団や第二次集団内(家族、町、職業、地域環境公式の集団、非公式の集団、作業集団、党派、組など)の中において個人間に行われる相互作用は全く考慮されていなかったのである。

左翼の知識人たちはマルクス主義者であれその同調者たちであれその信ずる理論に反していやむしろその理論の故に、こうした社会像をうけいていた。マルクスは第一次集団の衰退を予言してはいなかったであろうか。しかしこの時期(1930~1939)はまたマス・コミュニケーションの万能の神話が(ヒトラーやムッソリーニの全体主義的体制の経験によってつくられていたのはもちろんであるが)人々の精神を攪乱していた時代でもあった。この時代にはどの国でも多少とも、民主主義国においてさえ、宣伝研究機関や研究所が設置されていた。米国でも大新聞に対する統制法規が論議されていた。そして『大衆操作』とか『群衆抑制』が流行の方式となっていたのである。

1945年以降この神話は急速に解消していくのがみられた。この転期において研究は小集団やその構造および集団力学に対する方向づけを示し、それが決定的な役割を果たしたのである。クルト・レヴィンやモレノの学派は他の点からみると相違はあっても、ともに個人の行動や態度に対する小

集団の作用を強調、重視することになった。そうした発展のもう一つの要因は、1940年(ルーズヴェルト・ウイルキー)の大統領選挙における投票者の行動研究である。慎重な方法的準備をもってなされた大規模の調査によると、投票者はマス・コミュニケーションの影響下にあってもほとんど政治的見解を変えなかったことが明かとなった。¹⁾つまり、原子化された個人²⁾に対して観察されたマス・メディアの効果は極めて微々たるものであった。これ以後のすべての調査はみな、すべての領域において、マス・メディアの直接の効果は、それが行使される条件や個人の所属する諸々の集団あるいは個人間の相互関係(制度的なもの、あるいはもっと流動的のもの、インフォーマルのもを含む)であれ、一般に考えられるよりはるかに明確さを欠くもので、そのことは政治的意見であれ商業上の購買意欲であれ変りはない。人々はそれと同じくそう容易に考えをかえるものではないのである³⁾。

こうして今度はそうした変化に対する抵抗について研究がはじめられるようになった。つまりそうした変化はどこから生ずるのか、変化の実際の原因は何であるかに対する探求がはじまった。ここでもまたかなり概括的な機械論的心理学的接近よりは質的な社会学的接近がより有効であることが明かとなった。この社会学的接近は個人間の相互関係の役割や第一次集団および第二次集団(家族、労働集団、地域対集団あるいは民族的集団)、購買者集団、環境一町、地区、共同体、職業部類あるいは組合関係によって決定される集団に共通な価値の役割を発見することを可能ならしめた。これら集団の構造は、それ自体指導性がオピニオン・リーダーに所属するような伝達の網の目を予想している。⁴⁾ マス・コミュニケーションの効果は「二段の流れ」two step flow といわれるモデルに従って発揮される。その一つはメッセージの流出源(ラジオ、テレビジョン等)からオピニオン・リーダーへの直接的、垂直の流れである。このオピニオン・リーダーというのはマス・コミュニケーションによく接触ししかも同時に社会集団の価値や信念に緊密に参加し、しかもそこで一定の問題については文句なく権威をもっている人々である。第二はこれらのオピニオン・リーダー

を通じて直接の人格的接触とか集団内における個人の相互作用によってなされるメッセージの再伝達ともいえる間接的な、水平的流れである。

私は以上オピニオンの変化（説得的伝達）に関する研究の発展のうちから若干の事例をひき出したが、類似の変化を個人の観点—それは両親や教育者や各教会の当局者がたえず表明してきている道徳心にもとづく関心に対応するものであるが—から考察されたマス・コミュニケーションの影響、受動性、青少年犯罪、暴力、性行動についての研究のうちに指摘できるのであろう。とにかくマス・コミュニケーションが個人の脆弱な体質や先天的性格に及ぼす影響を過少評価してはならない。しかし新しい研究の方向が現れかけている。もはやマス・コミュニケーションを聴衆（特に児童）に対して十分な影響を及ぼす必然的で十分な原因と見ることはなくなった。それは多くの他の要因の中の一つにすぎず、それは全体的状況のうちに組みこまれているのである。だからその影響力はその内容が聴衆のなかの一定の成員が所属する第一次または第二次集団のもつ規範と多かれ少なかれ一致するかどうかによって異ってくるのである。

そしてマス・コミュニケーション研究の現状においては、しかもこれは現代産業社会についての考察にとって重要なことであるが、マス・メディアの影響力はそれが支配的な規範と合致するときにより一層大きくなることが認められる。それ故に、マス・コミュニケーションはそうした態度に従う傾向があるとともにとくに聴取者網が商業的に組織されている場合（これはフランスよりは米国において一層顕著であるが）には現存の価値や態度の強化要因としてはたらく傾向があると予想するのは当然である。

Ⅲ マス・コミュニケーションに対応する態度、役割、機能、要求、研究における社会学的接近

マス・コミュニケーション特にテレビジョンに関する研究の発展は以上の点に止まっているのではない。最近数年間に、とくに1958年以降この研究は新しい段階にはいったようで、それは英米両国における研究にも現われているが、フランス

の研究方向にもそれが看取される。

私は W. シュラムの言葉を敷衍して次のようにいいたい。「マス・コミュニケーションに関する研究は第一段階ではマス・コミュニケーションがそれをうけとる人々に与えるものについての研究を目ざしてきた。その後一部の重要な研究は受け手の個人がマス・コミュニケーションをどのようにするのかを明かにすることを主要問題点としてきた。つまり受け手はマス・コミュニケーションをどのように経験し、感じるか、彼等にとってマス・コミュニケーションとはどういう役割、どういう機能、どういう要求に依拠しているのかという問題である。」

こうした方向の研究はマス・コミュニケーションの経験は年令別、性別、教育程度別、第一次、第二次集団別、職業別などに分類して記述する方向に向った。それはマス・コミュニケーション利用者の類型構成を樹立しようとするものであった。またそれはこの方向において構造分析の方法によって検証されることのできる態度についての統計的モデルを構成することを目ざしている。この影響と機能との合流の傾向はヒンメルワイた Himmelweit とそのチーム⁵⁾ による優れた研究においては（第三部の児童の聴取者を除いては）まだ明瞭には見られないが、それより新しく刊行されたシュラムの最近の著作ではずっとはっきりと現れている⁶⁾。

シュラムと彼のグループはテレビジョンの児童に与える影響を新しい角度から研究している。シュラムは序文の中で次のようにかいている。

「影響という言葉は誤解をおこさせやすい、なぜならそれはテレビジョンは児童に対して何事かをなすということを示唆しているからである。…そのことはテレビジョンは働きかけるもの、児童は働きかけられる対象であるということを含意している」。

しかし方法的になされた考察によるとこれとは著しく異った結論に到達する。テレビジョンと児童との関係においては、児童の方が能動的な要素である。

「テレビジョンが児童を利用しているよりはむしろ児童の方がテレビジョンを用いているのである。そこで、これらアメリカの研究者たちの方

向づけは児童が一定の放送や番組を選び、それから満足を得ているのはどんな条件の下であるかを研究することである。だから彼等は現実・情報・認識の要求に対応する諸変数的要素や想像・夢・幻想 (fantasy) の要求に対応する変数的要素を区別してとりだそうと努めることになる。現実と娯楽の原理との関係においてマス・コミュニケーションの生きた経験のうちにあつて充足される要求のこの二元性は非常に示唆にとむ精神分析的な解釈を生みだしたのである⁷⁾。この点こそ社会学と他の人間科学との協力が必要と考えられる一の点である。

こうした潮流は1962年に著わされた Ira Glick と Sidney Levy の著作「テレビジョンとともに生活して」の中に明白にみらる。この著作は Social Research Incorporated 所属の心理学者や社会学者が非常に多数の視聴者をもつテレビ番組のスポンサーである大広告広社のために行った約70の一連の調査を総合したものである。影響についての研究が態度の研究に変わっていることは特に視聴者層の類型化の試みによく現れている。この類型化の試みは若干の目だつた欠陥はもっているが、それでもそれを裏付けし、またそのニュアンスを明かにする注釈を伴っているので社会学者にとっては重要な方向を確す一指標を示すものである。この研究は一定数の人口的、社会的基準にしたがつて、テレビジョンの機能と役割およびその人々による体験を識別している。

この著作に序文をかいているロイド・ウォーナーの人類学的発想は、視聴率の高い番組を通じてみられたテレビジョンの統一化機能の理論を主張するこの社会学的接近をすっかり補足している。社会生活が存続していくためには、その成員が、集団の統一と、個人の集団への統合を確保する、価値の共同の核心(世論、認識、信念)と「シンボル体系、(これはデュルケームの集合表象と類似の概念であるが、それと同じではない)に参加することが不可欠である。未開社会においては、シンボルの体系は簡単なものであり、すべての成員に知られていた。ところがきわめて複雑な産業社会においては、人々の活動の多様性、社会集団の様々なことから「シンボル体系、集合表象、は無限に多様となつてきて、数学や芸術、

宗教的信念、職業団体や民族的集団に関するものから、被服類、食品、日常生活に関するシンボルに至るまで雑多である。マス・コミュニケーションとくにその中もっとも普及しているテレビジョンはそれら共同の意義づけを再出現し、解釈し直し、これを維持し、それによって第一次集団や第二集団の個別性を克服する機能をもっている。マス・コミュニケーションは多くの場合、娯乐的なものとして一体となつて、非常に多数の個人の大家によって理解され、同化され受容され、うけいられるべき価値を負荷されたメッセージを導入しているのである。

Ⅳ マス・コミュニケーションの内容の研究

視聴者の大部分によって理解されるべきメッセージの媒体であるマス・メディアの統一化的機能とともに、われわれはマス・メディアと社会との関係において集団が現れてくる第四の局面、内容の社会学的側面に接近していくのである。ベレルソンが⁹⁾これについて行ったような形における内容の分析は1955年ごろまでは支配であったが、その後多くの批判の対象となつた、そしてそれらの批判の大部分は正しいものであつた。内容分析の急速な発展の段階を示すものはソラ・プール Sola Pool¹⁰⁾の著作である。フランスにおいてさえ、小人数の研究者の団体が1950年ごろ「映画社会学要綱」の草案をつくつたころからかなり永い努力が営まれてきた。

内容分析がだんだんと原典やメッセージの構造に関心をむけだしたのに応じて、それは社会学より構造言語学の領域に移つていった。それにも拘らず、内容が現実であれあるいは虚構的なものであれ、内容についての社会学的接近は可能であり、かつまた必要でもある。この意味において、人類学に適用された構造的分析は社会学にも重要な意味をもっている。一部の極めて形式主義的テーゼは例えば物語りや神話の内容を偶然的のものとしてみているが¹²⁾そうしたテーゼは社会学者にとつても構造主義者にとつても容認できないものである。(後者は第一形式と内容の区別を容認しないでいる。)

たしかに形式と内容は決定論の二つの異つた領

域である。しかし両者は相互に排除し合うものではない。社会学者も構造人類学者と同じく多くの文化から生じた範型(モデル)の体系の比較を重視してはいる。そしてわれわれ社会学者は同一役割から人類学的基体あるいは集团的構想(それは多くの文化を超越しかつ時にはすべての文化を超越できるものである)を参照することがある。また異った役割から各文化の特殊性を問題にする。この意味において一定の社会において構造分析によって発見されたモデルの体系は当該社会について多くのことを教えてくれる。しかしこれらのモデルはそれが根をはっている社会から抽出されてはならないのである。たとえば政治的主题、性的主题、人物状況、社会的役割、装飾、衣服のステレオタイプ(類型)はあえていうならば社会学者にとってよい獲得物なのである。もっともこの獲得物をとるのに独占的狩猟許可証を必要としないという条件においてはあがあるが。

ベレルソンが野心的にはあったが、余りに表面的に主張した頻度測定にもとづく内容分析を批判しこれを克服することは必要なことであった。そこで構造言語学の方法へ向ったことはたしかに実り多いものである。しかしながら、たらいの汚れた水と一緒に乳児(ここでは社会学者をいう)を捨ててしまうことは必要ではないことである。私は、現在行われている内容分析方法を再評価すれば、慎重にしかも量的にも考慮して事実の蒐集を行いかつたシンボルの内容の研究を行う社会学的接近と、もう一つの構造言語学から発想をうけつき内容を形式とをきりはない社会論理的接近とは補充的のものであることが明かになるであろうと確信している。

だから、社会学者にとってマス・コミュニケーションは追加的な領域でもないが、また唯一の独占的領域でもない。追加的でないというのはデュルケームがその権威的社会学に漸次新しい領域をつけ加えていったような意味で追加的であるのではない。デュルケームは道徳的事実、宗教的事実、経済的事実、政治的事実、言語学的事実と拡大し社会的自然の領域を漸次拡大していったのであるが、そうした意味での追加的領域ではない。しかし以上のべた統括的概観から明かなことは、マス・コミュニケーションは、社会学的調査の援助な

しでは、その調査方法を他の人間科学の調査方法と結びつけて深く研究することはできないということである。

—Notes—

- (1) LAZARFELD (P. F.), BERELSON (B.) & CAUDET (M.), *The People's Choice*, New York, Columbia University Press, 1948.
- (2) KLAPPER (J. T.), *The Effects of Mass Communications*, Glencoe, The Free Press, 1960.
- (3) NARCUS STEIFF (J.), *Les études de motivation*, Paris, Hermann, 1961.
- (4) KATZ (E.) & LAZARFELD (P.F.), *Personal Influence: The Part Played by People in the Flow of Mass Communications*, Glencoe, Illinois The Free Press, 1955.
- (5) HIKKELWEIT (H.J.), OPPENHEIM (A.W.) & VINCE (P.), *Television and the Child*, London, Oxford University Press, 1960 (1ère édition 1958).
- (6) SCHRAMM (W.) LYLE (J.) & PARKER (E.B.), *Television in the Lives of our Children*, Stanford, California, Stanford University Press, 1961.
- (7) HERZOG (H.), *Motivations and Gratifications of Daily Serials Listeners*, in Paul F. Lazarsfeld and Frank Stanton, *Radio Research 1942-1943*, Duell, Sloan and Pearce, 1944.
- (8) GLICK (I.) & LEVY (J. S.), *Living with Television*, Aldine Publishing Company, Illinois, 1962.
- (9) BERELSON (B.), *Content Analysis on a Tool of Communication Research*, Glencoe, Illinois, The Free Press, 1952.
- (10) SOLA POOL (I. de), *Trends in Content Analysis*, University of Illinois Press, 1953.
- (11) FRIEDMANN (G.) & MORIN (E.), *Sociologie du cinéma*, *Revue internationale de filmologie*, Paris, vol. III, no 10, 1952, p. 95-111.
- (12) PROPP (V.), *Morphology of The Folktale*, Mouton & Co, 1959.

以上は昭和46年11月16日フリードマンが本学で行った講演全文である、なを以下参考までに同氏の著作目録をかかげることにした。

Georges Friedmann (1902~) 著作目録

著書

Problèmes du machinisme en U. R. S. S. et dans les pays capitalistes, (1934)

- La crise du progrès, (1936)
- De la Sainte Russie à l'U.R.S.S., (1938)
- Les Problèmes humains du machinisme industriel, (1947., 2e. 1955)
- Humanisme du Travail et Humanités, (1950)
- Où va le travail humain?, (1951, 2e. 1954)
- Villes et Campagnes, (G. Gurvitch と共同編著) (1953)
- Le Travail en miettes, spécialisation et loisirs, (1956)
- Problèmes d'Amérique latine
- Traité de Sociologie du Travail (P. Naville と共同編著) 2 vols., (1961)
- Fin du peuple Juif?, (1965)
- 7 Etudes sur l'Homme et la Technique, (1966)
- La Puissance et la Sagesse, (1970)

論文 (主要なもの)

- Automatisme et travail industriel, (*Cahiers Internationaux de Sociologie*, Vol. I, (1946)
- Progrès technique et progrès moral, (*Rencontres Internationales de Genève*, 1947)
- Les Technocrates et la crise de l'idée du progrès entre les deux guerres mondiales, (*Eventail de l'Historie Vivante*, 1949)
- Des droits de l'esprit et des exigences sociales, (*Rencontres Internationales de Genève*, 1950.)
- Techniques industrielles et condition ouvrière, (*Esprit*, 1951.)
- Les Conséquences Sociales du Progrès Technique (avec J. D. Reynand) (*Bulletin International des Sciences Sociales*, Unesco, Bd. IV, 1952.)
- Heidegger et la crise contemporaine de l'idée du progrès (*Cahiers Internationaux de Sociologie*, vol. 16, 1954).
- L'Encyclopédie et le travail humain, (*Annales*, 1953.)
- Communautés rurales et milieux naturels, (*Annales*, 1954.)
- L'angoisse du temps présent et les devoirs de l'esprit (*Rencontres Internationales de Genève*, 1954.)
- Perspectives d'un humanisme du travail, (*Esprit*, 1954.)
- Les jeunes aux prises avec notre monde

- technique, (*La Nef*, 1955.)
- De la méthode en sociologie du cinéma, —avec E. Morin— (*Bulletin de Psychologie*, 1955.)
- Le contenu familial et social des films actuels,—avec E. Morin et L. Brams. (*Ecole des Parents*, 1955-56.)
- Psychanalyse et Sociologie, (*Bulletin de Psychologie*, 1956.)
- Transformations de la structure industrielle, (*Transactions of the Third World Congress of Sociology*, vol. II, 1956.)
- Problèmes du Sociologie Industrielle,—avec J. D. Reynand et J. R. Tréanton.— (*Traité de Sociologie*, édit par G. Gurvitch t. 2. 1958.)
- Enseignement et culture de la masse, (*Communications* n. 1 1962.)
- Culture pour les Millions (*Communication* n. 2 1963.)
- L'école et les communications de masse: opinions, documents, débats (*Communications* n. 2)
- Le loisir et la civilisation technicienne, (*Revue Internationale des Sciences*, n. 4. 1960.)
- La télévision vécue, (*Communications* n. 3. 1964.)
- Une rhétorique des Symboles (*Communications*, n. 7, 1966.)
- La sociologie des communications de masse, (*Revue de l'Enseignement Supérieur*, 1-2, 1965.)
- Les Intellectuels et la culture de masse. (*Communications*, n. 5. 1965)
- Israël en statistiques. (avec M. Th. Basse). (*Revue française de sociologie* 6, n. 3, 1965.)
- La civilisation technicienne et son nouveau milieu (in *Mélanges A. Koyré*, t. II. 1966)
- Télévision et politique, (*Quinzaine Littéraire*, 1967. (1))
- Télévision et démocratie culturelle, (*Communications* n. 10. 1967.)
- A propos du loisir: l'organisation du temps de vie des hommes, (*Urbanisme*, no. 100, 3, 1967.)

(小関藤一郎訳および註)